群教セ	F08 － 01
	平27.257集
	生徒指導

自己有用感を高め、いきいきと学校生活を送ることができる生徒の育成

――評価比較対照カードの作成と活用を通して――

特別研修員　小林　直也

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

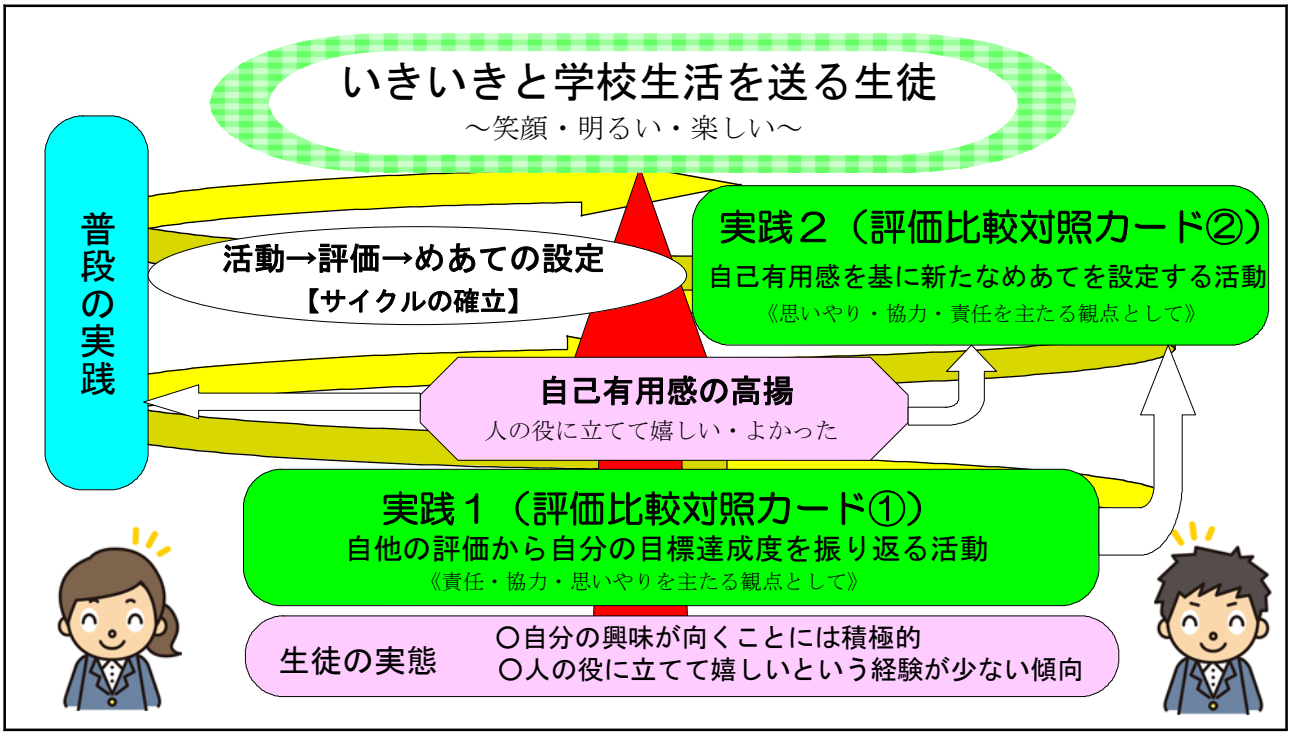
「国立教育政策研究所」発行の生徒指導リーフの中では、人と関わることにより社会性の基礎が培われるとされている。そして、「誰かの役に立つことができた」「自分から働きかけることができた」という集団の一員としての自信や誇りの獲得が期待されている。また、「平成２７年度　学校教育の指針（群馬県）」の中に、「いじめの未然防止に向けた人間関係づくりを進める取組の充実」として、自己有用感をはぐくむ教育活動の充実が挙げられている。これらのことから、生徒には人との関わりを通して社会性の基礎を身に付け、自己有用感を高めることが重要であると考える。

生徒指導リーフの中で、自己有用感とは、「自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れたことで生まれる、自己に対する肯定的な評価」であると述べられている。本学級の生徒は、自分の興味が向くことには積極的に取り組めるが、人の役に立てて嬉しいという経験が少ない傾向が見られる。ともすると、自己中心的で、他者との協力には消極的な姿にも見えかねない。そこで、学校生活の中で「集団の一員として進んで協力できた」「誰かの役に立つことができた」という自信や誇りを持たせることにより、生徒の自己有用感を高めたいと考えた。

以上のことを踏まえて、他者やクラスのために自分は何ができるかという目標を一人一人に立てさせ、その目標の達成度について評価比較対照カードを用いて相互評価をし合う。そして、その評価を基に他の活動や行事に向けて新たな目標を設定するというサイクルを作ることで、生徒の自己有用感を高め、いきいきと学校生活を送ることができる生徒の育成につなげたいと考え、本研究テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

⑴ 実践１における手立て

実践１における手立てを以下の２点とした。

①他者を評価する際の観点を「責任・協力・思いやり」とし、個人が立てた目標に向けて活動できていたかどうかという点に絞ること。
②評価比較対照カードを用いて、自己評価だけでなく他者評価と合わせて、自分の目標の達成度を振り返ることができるようにすること。

評価の観点を示すことで、友達の様子を見るべき点が明確になった。ほとんどの生徒は、友達からの評価の方が自分の評価よりも高くなり、自分がしたことが友達に認められたことで、「うれしかった」、「頑張ってよかった」という感想を持ち、人から認められて自己有用感が高まった姿が多く見られた。そこで次の段階として、高まった自己有用感を基に、生徒に今後の生活上での新たなめあてを持ち、実践していく力を育成していくために実践２の手立てを設定した。

⑵ 実践２における手立て

実践１を受けて、実践２における手立てを以下の２点とした。

①自己評価だけでなく他者評価と合わせて自分の目標の達成度を振り返ることができる評価比較対照カードを用いることで、自己有用感を高めながら、次の活動（普段の生活）の中での新たなめあてを持つこと。
②これまでの活動を通して学習してきた「思いやり・協力・責任」を観点として、自分の立てためあてや「いきいきと生活するためのキーワード」を基に、今後の生活でどのようなことを心がければよいかということについて、グループで話し合うこと。

生徒一人一人が高まった自己有用感を基に、自分自身の生活上の新たなめあてを設定する。自分自身のめあてと、「いきいきと学校生活を送るためのキーワード」をヒントとして、今後クラス全体として心がけていくことについて話し合い、それをクラスのめあてとして設定する。そして、そのめあてを一人一人が意識しながら生活の中で実践していくことで、いきいきと充実した学校生活を送ることにつながっていくと考えた。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　評価比較対照カードを利用することにより、自己評価と他者評価が１枚の紙面で比較・対照することが可能になるとともに、自分自身の行動を多面的に振り返ることができた。また、他者からの評価では、相手の目標を把握し、活動や取組についてよく見ることで、肯定的に評価するということが可能になり、生徒の自己有用感を高めることにつながった。

○　「学校行事や日常の活動　→　自己評価と他者評価の双方を基にした自分自身の振り返り　→　次の活動（今後の生活）に向けためあての設定」というサイクルを確立することによって、生徒の自己有用感は高まり、それにより充実した学校生活を送ることができると感じる生徒が多く見られるようになった。

２　課題

○　自己有用感を高め、めあてを実践していくために、授業だけでなく普段からの習慣付けが重要になる。また、教師自身が肯定的な見方や接し方のモデルとなるとともに、生徒の様子を観察したり、発言やつぶやきに耳を傾けたりして、指導に生かすことが必要である。

○　道徳の授業（価値項目：思いやり・公共心・役割の自覚など）の内容と関連付けて指導することや、各教科の授業の中で生徒同士の関わり合いや認め合い活動を取り入れるなど、計画的・継続的に自己有用感を高める指導をしていくことが必要である。

＜授業実践＞

実践１

１　題材名　　「川越旅行を振り返ろう」　（第１学年・１学期）

２　本題材及び本時について

本時は、川越旅行について、自分と友達の活動について振り返る活動である。ここで、生徒は班の中での自分の役割に合わせて、自分が立てた目標を達成できたかどうかを自己評価する。それとともに、友達からも自分の目標の達成の度合いを評価してもらい、自己評価と比較する。これらの活動は、これからの自分自身の成長や生活に生かしていこうとする態度を育成するために行うものである。

事前指導として、生徒には自分自身が班のために貢献できることを目標として設定させ、評価比較対照カード①（図１）に記入させておくとともに、友達と各自が立てた目標を互いに共有させておく。班は６名の男女混合グループとし、生徒には自分自身の目標の達成度を自己評価するだけでなく、他の班員が立てた目標を確認し、その良いところ（できたところ、頑張ったところ等）を見て評価するように伝えておく。また、各自の目標を班の全員で共有することにより、旅行の班活動の中で友達を見る際、「責任・協力・思いやり」という観点で見ることを確認しておく。

このような評価活動を取り入れたことにより、生徒は自分自身の目標の達成度を振り返ることができ、評価される生徒は自分が班のためにとった言動について肯定的に評価してもらえることはもちろん、その相互に評価した内容が１枚のシートで確認できることにより､自己有用感を高めることができると考える。

３　授業の実際

本時の授業を行うにあたり、事前の準備として以下のことを行った。

○　旅行の班を決定するとともに、その中での役割分担を決定すること。

○　自分に与えられた役割から、自分の目標を立てること。

○　自分の立てた目標を班員と共有すること。

また、川越旅行の当日も含め、班員の目標の再確認と「良いところ」､「できたところ」に目を向けて見るように伝えた。

本時の授業では、評価比較対照カード①（図１）に、まず生徒が目標に対する自己評価を行い、Ａを最も良い評価としてＤまでの４段階で評価し、その理由も具体的に述べるようにさせた。「何が」「どのように」できたから（できなかったから）このように評価したというように、ただ何となくではなくしっかりと理由も記述するように指導した。

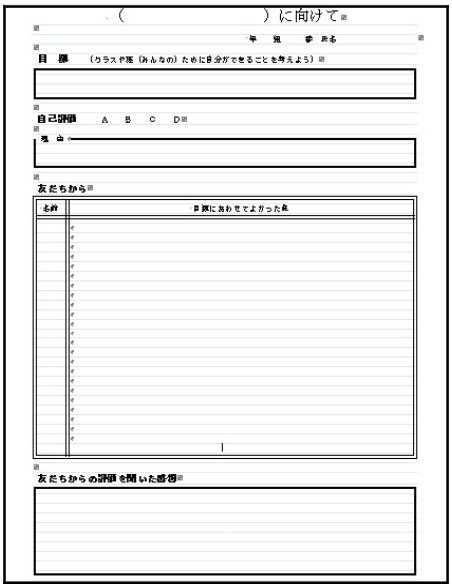

（　　）に向けて
年　組　番　氏名
目　標　（クラスや班（みんなの）ために自分ができることを考えよう）
自己評価　A　B　C　D
理　由
友だちから
名前　目標にあわせてよかった点
友だちからの評価を聞いた感想

図１　評価比較対照カード①

他者評価については、自己評価を書いた評価比較対照カード①を班員全員で回覧し、それぞれが評価内容を記入した。そのときの手立てを以下の２点とした。

①友達を評価する際の観点を「責任・協力・思いやり」とし、個人が立てた目標に向けて活動できていたかどうかという点で評価させること。

②評価比較対照カードを用いて、自己評価だけでなく他者評価とともに、自分の目標の達成度を振り返らせること。

①については、各自の目標を達成するために、自分に与えられた役割において「責任」を果たしていたかということを中心として、班の友達と「協力」できていたか、「思いやり」の気持ちを持って友達に接することができていたかという観点で評価することとした。見るべき点が明確になったことで、生徒は友達の様子を評価しやすく感じているように見受けられた。また、ほとんどの生徒が、友達から肯定的に評価されたことに喜びや嬉しさを感じていることが、授業中の表情や評価比較対照カードの記述から見受けられた。

②については、主観的な評価と客観的な評価を比較・対照しながら、自分の目標の達成度を再確認することにより、自他共に納得できる適切な評価となるようにした。自分で評価するよりも、友達からの評価の方が高い生徒が多く見受けられた。

自己評価と友達からの評価を聞いた感想の記述では、以下のようなものが見られた。（生徒の原文から）

生徒１（男子：班長）　自己評価：C（あまりできなかった）
理由：ほかの班の人達が自分よりちゃんと行動していたのでまとめようとする必要がなかった。
感想：自分的にはあまりできていないと思っていたけど、みんながよくできていると書いてくれたのでよかったです。
生徒２（男子：地図係）　自己評価：C（あまりできなかった）
理由：みんなを違った道から正しい道にできなかったから。
感想：自分が思っているより、みんなからの評価が良かったので良かったです。
生徒３（男子：時計係）　自己評価：B（だいたいできた）
理由：きちんと班の人に時間を伝えられた　時間を気にしすぎてしまった。
感想：時間を気にしすぎてせかしてしまったのにほめてくれてよかったです。
生徒４（女子：写真係）　自己評価：B（だいたいできた）
理由：みんなの写真をとることができたけど少し写真の量が少なかった。
感想：良い評価をしていてくれたので反省もできた。
生徒５（女子：保健係）　自己評価：B（だいたいできた）
理由：健康チェックがあまりできていなかった。でも、けが人、体調の悪い人がでなくて良かった。
感想：よくできていたと言う評価がたくさんあったので良かった。次も同じように、班の一員として頑張りたい。

上記の感想と同様の記述が多く書かれていたことから、評価比較対照カードを利用した授業を行ったことにより、ほとんどの生徒は自己有用感を高めることができていたと考えられる。

４　考察

○　「責任・協力・思いやり」という観点を提示したり、肯定的に評価するという観点を示したりしたことで、友達に対する評価の観点が明確になった。友達からの評価の多くが肯定的かつ自己評価より高いものだったため、24名中20名の生徒の感想が「係の仕事がきちんとできていたと書いてもらって嬉しかった」など、肯定的な記述になったと考えられる。また、「嬉しかった」だけにとどまらず、「次もこのようなことがあったら自分の役割を果たしたい」といったように、次の活動に向けて自身の新たなめあてを持つことのできた生徒も７名いた。

○　各行事の際に相互評価活動に取り組むだけでなく、学級の係や専門部活動、清掃や給食の配膳などの普段の活動においても他者をよく観察し、肯定的に評価する機会を設定することで、生徒にとって互いの良いところを認め合うことが日常的な活動になるように指導を継続する。

○　「肯定的に評価する」という活動であったため、他者を評価する活動の際、評価する時も評価される時も多くの生徒が明るい表情で、意欲的に取り組むことができた。自己評価より他者評価の方が肯定的で高い評価になっている生徒も数名おり、感想の記述などから自己有用感の高まっている様子が見受けられた。

○　目標の設定が曖昧な生徒がおり、その目標の達成度を評価しなくてはならない生徒が苦労する結果となった。目標の設定に際しても、「相手のことを意識」するとともに「評価の観点を意識」して行うことを徹底したい。

実践２

１　題材名　　「ターゲットバードゴルフ大会の活動の様子をお互いに評価しよう」
（第１学年・２学期）

２　本題材及び本時について

本題材は、地域の高齢者との交流活動の一つとして行われるターゲットバードゴルフ大会での目標達成度を友達と評価し合うことを通して、次の活動に向けてのめあてを持たせる活動である。高齢者との交流会の目標を個人が設定し、それを同じ班の友達と共有して、評価比較対照カードを利用するということは、実践１の川越旅行の時と同様である。

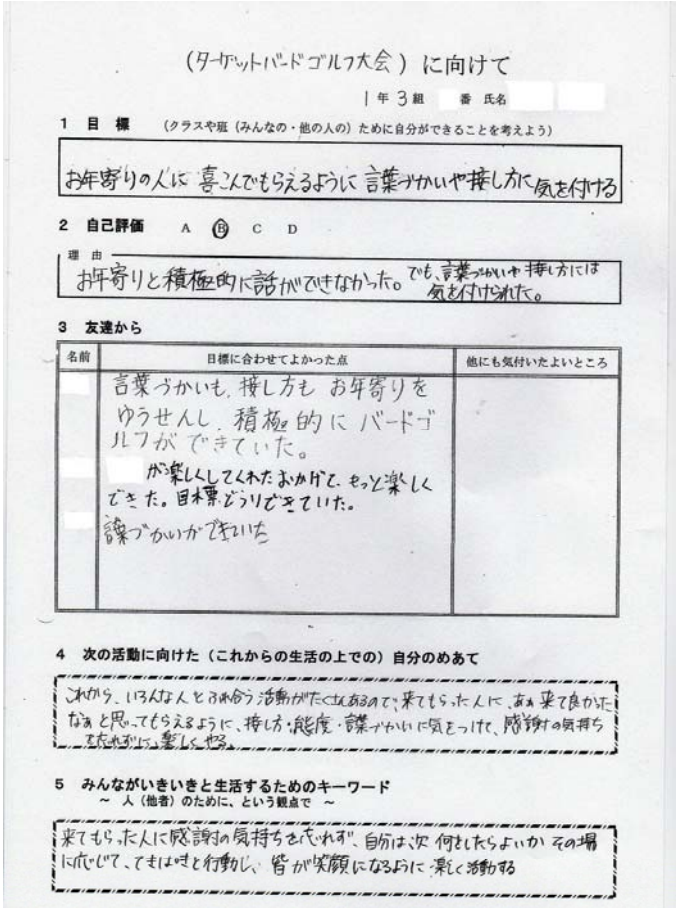
今回は、評価し合ったことを基にして、今後の生活において自分が心がけていきたいこと（めあて）を設定する。高まった自己有用感を生活の中に生かしていくことを意識化させ、実践していこうという意欲を高めていくためである。また、自分が立てためあてと『みんながいきいきと生活するためのキーワード』を基にして、学校行事など特別な場合だけでなく、今後の生活の中でどのようなことを心がければよいかということについて考え、話合い活動を行う。個人が立てためあてを互いに持ち寄り、クラスのめあてを話し合いにより設定することで、生徒は自分自身のことだけでなくクラスの友達などに対してどのような働きかけや心配りをしていけば良いかということに対しての意識を高め、より充実した中学校生活を送ることができると考える。

３　授業の実際

本時の授業は実践１を受けて、本時の授業で生徒自身が設定した今後の生活に向けてのめあてと「みんながいきいきと生活するためのキーワード」を基に、クラスの生活のめあてについて話し合う活動である。

事前指導として、実践１と同様に、地域の高齢者の方との交流会である「ターゲットバードゴルフ大会」に向けての個人の目標を設定し、それを同じ班の友達と共有させておいた。評価する際の注意事項として、友達の活動を肯定的に評価することを再確認した。また、高齢者との交流を主旨とする活動なので、評価の観点を「思いやり・協力・責任」とした。さらに、「ターゲットバードゴルフ大会」の翌日には、生徒に自分自身の振り返り、自己評価とその理由の記述をさせておいた。

「みんながいきいきと生活するためのキーワード」については、「いきいき」とは具体的にどのような状態であるかを生徒に確認した。生徒からは、「笑顔」「明るい」「楽しい」「充実」「元気のいい」「不自由のない」という言葉が挙げられたので、本時の授業の際に生徒に確認しながら再提示することとした。


（ターゲットバードゴルフ大会）に向けて

１年３組　番　氏名

1 目標　（クラスや班（みんなの・他の人の）ために自分ができることを考えよう）

お年寄りの人に喜んでもらえるように言葉づかいや接し方に気を付ける

2 自己評価　A　B　C　D

理由

お年寄りと積極的に話ができなかった。でも、言葉づかいや接し方には気を付けられた。

3 友達から

名前	目標に合わせてよかった点	他にも気付いたよいところ
	言葉づかいも、接し方もお年寄りをゆうせんし、積極的にバードゴルフができていた。	
	が楽しんでくれたおかげで、もっと楽しくできた。目標どうりできていた。	
	言葉づかいができていた	

4 次の活動に向けた（これからの生活の上での）自分のめあて

これから、いろんな人とふれ合う活動がたくさんあるので、来てもらった人に、あぁ来て良かったなぁ と思ってもらえるように、接し方・態度・言葉づかいに気をつけて、感謝の気持ちを忘れずに楽しくやる。

5 みんながいきいきと生活するためのキーワード
～ 人（他者）のために、という観点で ～

来てもらった人に感謝の気持ちを忘れず、自分は次何をしたらよいかその場に応じて、てきぱきと行動し、皆が笑顔になるように楽しく活動する

図２　評価比較対照カード②

本時では、友達を評価することから始めた。評価比較対照カードを利用しての評価活動は２回目なので、評価の方法や記述については既習事項のため、また肯定的な評価をしてもらうということが前提の活動のため、生徒は安心して楽しそうな表情で取り組むことができた。

次に、今後の活動に向けた自分のめあてについて考えさせた。（図２）

図２にある記述の他にも、以下のような記述が見られた。（生徒の原文から）

生徒１（男子）
　積極的に発言・返事をする。誰にでも明るく接する。
生徒２（女子）
　まわりの人への思いやりの心をもち、自分の仕事への責任をもち、進んで行動できるようにする。

どの生徒も、評価の観点に挙げた「思いやり・協力・責任」や「いきいきと学校生活を送るためのキーワード」、他者への協力や周囲の人との協調を表す言葉が、そのままもしくはそれを表現する形で自分のめあてを記述していた。クラスではここに挙げた生徒も含めて、24名中22名の生徒が同様の記述内容であった。

そのめあてと「いきいきと学校生活を送るためのキーワード」を基に班で話し合いをし（図３）、クラスのめあてをまとめることができた。

図３　今後のめあてについて話し合う様子

まとめためあて（図４）については、日頃からの意識付けを意図して、文字を読めるようにＡ３版に拡大し教室に掲示することで、いつでも生徒が見直したり読み返したりできるようにした。めあてを考える際、班のメンバーで話合いを行ったが、ほとんどの生徒が互いの意見を尊重し、自分の考えを出し合うことができた。教師が生徒の役割をそれほど固定せずに話し合いをさせたが、話合いの筋道が大きくそれることもなく、協力してめあてを考えることができた。

４　考察

○　事前に、「いきいき」という言葉が表す意味や、具体的にどのような状態であるかを生徒に考えさせて、クラスで共有しておいた。「笑顔」「明るい」「楽しい」などの言葉が挙げられたので、今後の生活のめあてを話し合う際に提示した。挙げられた言葉がめあてを考える上でのキーワードになっていたので活発な話合いが行われ、各班でクラスの今後のめあてをまとめることができた。（図４）

○　授業後に行ったアンケートで寄せられた意見の中には、「普段、自分のことでほめられたりすることがないのでうれしかった」など、自己有用感の高まりを感じる意見や「授業で心がけることをしっかりと定めることができたので、それを日々しっかりと実践できるように頑張りたいです」など、話し合われためあてを、今後の生活で実践していこうという前向きで意欲的な意見も見られた。

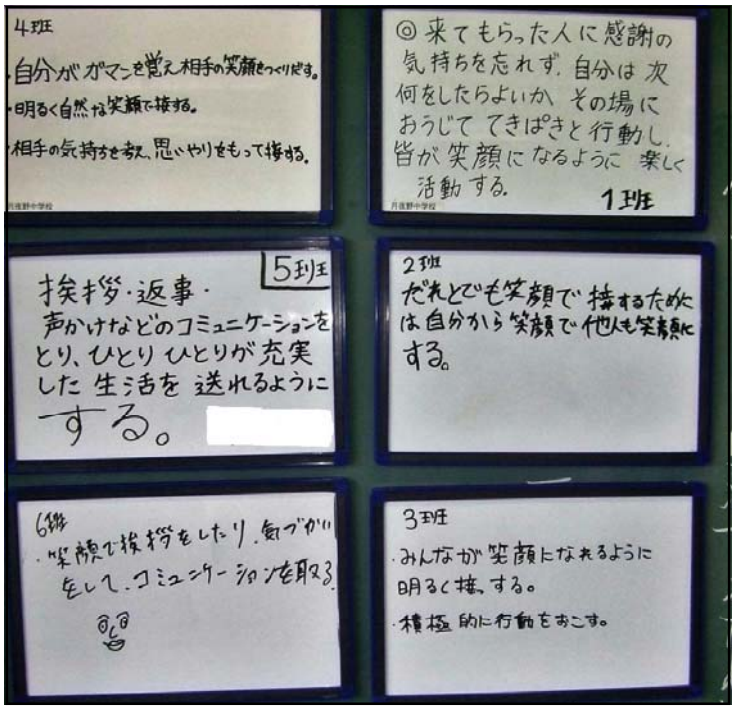


図４　各班で話し合ったクラスのめあて